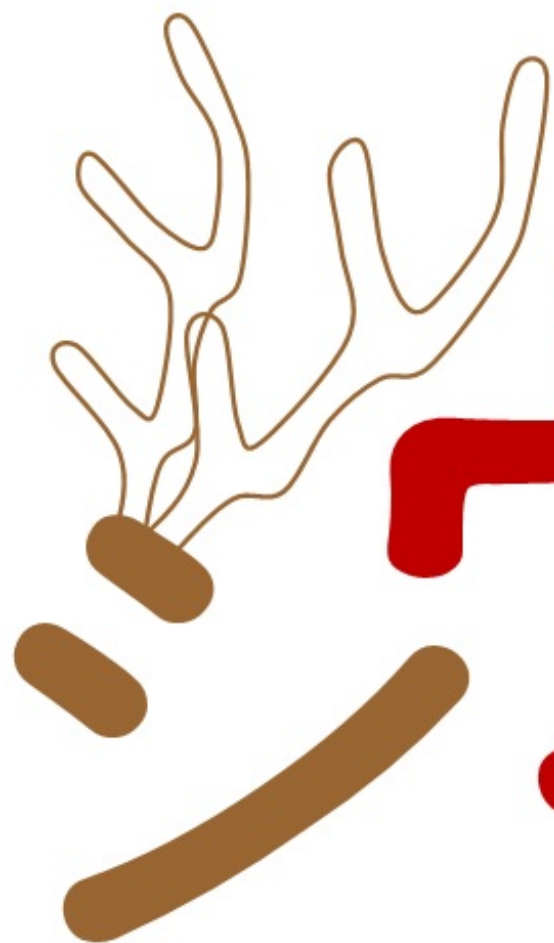


第三回 『監獄の誕生』と丸刈りの消失

考



え

マ

る

カ

弦楽器イルカ+友人

いや、やめなくていいよ。むしろ監獄の続きが読みたいし。とはいえ、急に詳しくなってるからびっくりした。そっち方向で来たんだ。「ビッグ・ブラザー」もアイドルの前では霞んで消し飛んだ感じかな。謝罪と体罰、金と擬似恋愛、春樹風文学表現。いろんなキーワードがあったけど、ちょうど空気の話題とつながってて、別角度な感じが面白かった。

さて、丸刈りの誕生と消失についてはもう広げたくないから終わりにするつもりだけど、テレビの中の華やかな箱庭がやっぱ金と欲の監獄だったってオチで以下、乱暴にまとめたい。

巷のいろんな意見を読んだけど、丸刈りの人（って敢えて呼称してみる。演歌風に。名前書くの嫌だから）ひとりに責任押し付けんのは、情况分析が足りないと思う。

まず第一に、あの丸刈り演出が誰の発案か、結局は藪の中である点。第二に、所詮20歳そこそこの小娘らにファンが入れ上げて周りの大人が乗っかって、虚像を巨像にしてるだけな点。そして第三に、スクープした方もされた方も悪趣味なビジネスだっていう点。

それらを棚上げにして、本人にだけ「覚悟の上だろ」「ビジネスに責任取れ」「相手の男が可哀相」って突きつける部外者は、ヤツらが作ったルールに加担して増強してることに気づいてないか、乗っかって楽しんでるだけだ。俺にとっちゃ、同じ悪趣味の範疇だ。

あの動画を大人が配信した瞬間から、この話は丸刈り本人の手を離れてる。でも謝罪してるのは本人だけで、周りの大人は知らんぷりをしてる。あと翌週にはまた新しいスキュンダルがあったけど、今度はもう報道自体を止めたっぽいね。とりあえず、これ以上の炎上商法は逆効果って判断だろう。結局、情報を流すか止めるか、ヅラをかぶせるか否かは、金の動きで大人が決めてるってカラクリだ。

やった、これで監獄の誕生だ。ってことにならないかね。ならないか。そもそもフォーコー読んだことないし。まあいいや。ちなみにオランダにいる友達に聞いたら、向こうでは丸刈りは全然報道されてないって。悪趣味が広まらんでよかった。これにて、丸刈りの消失ってオチなんだけど、実は後日談がある。

せっかくだから二つ企画を考えた。ひとつは、アイドルグループに今後やってほしいこと。もうひとつは、丸刈りの誕生と消失をめぐる小説のあらすじ。書いてるうちに大幅加筆でだいぶ大型企画になっちゃった。読むなら気合い入れてお願いします。

まずひとつめ。CD買って投票するシステムで、社会参画する企画。

つまり、あれってファンの祭りのワケでしょ？ 若者の感覚じゃ、国の政治は中高年の組織票が牛耳る他人の「まつりごと」で、若者は蚊帳の外って思うワケじゃん。実際は若者も投票行為して投票率が上がれば若向きの風は吹くと思うけど。とりあえず政治家はおっさんばっかだしビジュアル的に若者向きの祭りじゃない。

そこで、たくさんCD買って俺らの祭りを盛り上げようぜって話でしょ？ 一位になって涙するアイドルが眩しすぎて、売り上げで喜ぶおっさんの背景は目に入らない。あのスポットライトが、

儲けたおっさんの脂でテカってることに気づいてない。それとも、どうせおっさんに踊らされるなら、「同じアホなら踊らにゃ」って自覚してるのかな。でも、そこまで気づいてるなら「ヲタ」共よ。もう一声踊らされようよ。おっさんの掌を飛び越えるまで踊り狂おうよ。

つまり、個人の容顔や魅力に対して投票するのはやめて、それぞれの政策で評価して投票しよう。つまり、アイドル一人ひとりがそれぞれの政策を掲げて、たとえば消費税とかTPPとか右とか左について発言した内容で、票を勝ち取る。そしたら彼女らも、今回得票が少なかったのは自分の政策が悪かったせいだって、魅力のなさだけを責めずにすむし、良くも悪くも「ヲタ」って呼ばれてるファンも、実は社会のことを真剣に考えてる、背後のおっさんに二羽織りされてるだけじゃないって評価が上がる。

でもこれ無理だな。だってできるだけ政治に無関心な愚民を作るのが支配者の思惑でしょ？ 気持ちいいほど極論するけど。これじゃ反社会的アイドルって言われちゃうよね。でも、面白くない？ 若い娘たちが熱い政策バトルを展開し、それを見守る「ヲタ」共の熱い視線って、新しいショーの幕開けて気がしない？ しないか。どうせなら政策カードとか作って、カードバトルまでやってほしいね。「TPPカード発動よ！ 自由化で好きな相手カードを一枚取得できるわ」とか、「じゃ消費税カード発動ね！ 雪ダルマ式でターンごとにカードが増えちゃうの！」みたいな。ライバルのモモクロが、「若者よ働け」とか大槻ケンジ作詞の労働賛歌を歌ってるらしいから、たぶん方向性は間違っていないよ。たぶんね。早すぎるだけってことにしよう。

んでもうひとつ。今回の目玉企画。小説のあらすじを考えました。特濃バージョンでお楽しみください。

報道カメラマンの夢に挫折し、しがないフリーのカメラマンを続ける秋元は出版社の依頼を受けてアイドルのスキャンダルを追跡し、ついに独占スクープを掴む。そんで丸刈りが誕生する。物語はまさに今ここから始まる。

自分がアイドルを追い込んだことに罪の意識を感じながらも、ファンの報復を恐れ自宅へ戻らず、地方を取材する秋元に、一本の電話が入る。「警察の者だが」。会って話が見たいと。警察と聞いて警戒しながらも、話を聞く決心をする秋元。

警察は、アイドルグループの裏側を追っていた。実は埼京（最強）連合という裏組織と密接に結びつくアイドルたち。マスコミや財界、政界に食い込むための破廉恥な接待の数々。

ここで割かれるページ数たるや。猥褻描写でワシ掴まれる読者たち。そして悶々とする秋元。「俺も接待されてえ！」

いや、方向性を間違えた。軌道修正。

警察は秋元に協力を依頼する。懐から一人の女の子の写真を差し出す。このアイドルの裏接待をスクープしてほしい、と。

秋元も業界人の端くれとして、その娘の名前は一目で思い出せた。佐藤とさ。「前から後ろから応援してね！」のキャッチコピーが初々しい、今最も旬な売り出し中のアイドルだ。

「彼女まで接待を？」「そうだ。彼女は特に業界では具合が良いと評判になっている。具体的

には……」「聞きたくない！これ以上悶々とするのはまっぴらだ！」

頑なな拒絶に黙り込む警察の人。気まずい感じ。ここの気まずさをどこまでリアルに表現できるかが、この小説の肝だね。まあそれはどうでもいいとして。

「君はもう、あのスクープを撮った時点でこの件に片足を突っ込んでいるんだ。気づいてはいないだろうが、裏社会は君を追っている」「なぜ？」「あの坊主事件、あれは見せしめだ。ここから裏社会との関係を暴くつもりなら、ただじゃおかないと業界に知らしめるための」「あの坊主にそんな意味が？」「たぶんね」「たぶん？」「大体そういう感じだと思うって意味の、たぶん」「言葉の意味は大体知ってる」「たぶん？」「いや、ちゃんと」

また脱線した。

アイドルを金ヅルとしか考えず、女の子を丸刈りにまで追い込む裏組織に憤りを感じる秋元。「撮ってやる。その証拠、掴んでやる」

警察からの情報をプライドから拒み、自分の足で聞きこみ、とさの接待現場を捉えた秋元。しかし、とさは破れた服でホテルから飛び出す。慌てて後を追う秋元。

「あたしやっぱり、接待なんてできない！」「それで政治家をひっぱたいて逃げてきたって言うのか？でも、これがはじめてじゃないんだろ？」「はじめてよ。ずっと断って来たの！」「なに？」

ひょんなことからとさをかくまうことになる秋元。二人を追う黒スーツの男たち。徐々に明らかになる裏組織の陰謀。そして警察の裏切り。

「なぜ、警察のあんたが俺らを殺しに？」「なぜって。これから死ぬヤツに教えるワケないじゃん。2時間ドラマじゃあるまいし」「待ってよ。次はちゃんと接待するから。この人は関係ないでしょ？」「今更、自分勝手なお姫様だ。接待はしない。でも恋愛はしたいと。安っぽすぎて使い捨ての駒にもなりゃしない」「なぜとさのスクープを俺に追わせた？殺すつもりならはじめてからいくらでも」「だから、教えないってばさ」

次の瞬間、警察が振り下ろした警棒を、身代わりになって受ける、丸刈りの人。

「あたしがこの男を抑えるから、早く逃げて」「そんな、丸刈りで……」「いいから！あたしはこいつを許さない。アイドルは人間なの。人間だから恋したり失敗する！あたしはマネキンじゃない！」

丸刈りの人に助けられ、その場から逃げ出す二人。寄る辺ない逃走の末、辿り着いた安宿で身を寄せ合う二人。

「あの丸刈りのコね、あたしと仲良かったんだ。あのコも裏接待を拒んでて。でも合コンとかは好きでね。そんなのやめときなって言ってただけど。裏接待を拒んだ制裁でスクープを売られたのかもって、前に言ってた。…気づいたら、丸刈りにするしかなくて。変だよ、アイドルって」「…俺が、撮ったんだ。あのスクープ。出版社の依頼で」「え！」「君のスクープも奴に依頼されてた。でも君は接待しなかった。まさかそれで殺しに来るとは思わなかったが。俺の責任だ。君まで巻き込んで」「それは違うよ。あたしもあのコも、自分で決めてここまで来たんだから。…いずれこうなってた。まさかこんな裏のある世界だとは確かに思わなかったけど。でも秋元さんはあたしを命がけで助けてくれた。ありがとう」「いや」「それに、あたしがもしホテ

ルで接待してたら、アイツは殺しに来なかったかも。秋元さんも狙われずにすんだのかもしれない」「それはどうかな。俺ははじめから消されるリストに入ったような気がする。...しかしアイドルってのも大変な商売なんだな。そういや、営業マンの親父がよく言ってたな。商売ってのは商品を守るんじゃない、魂を売るんだって」「...じゃ、アイドルも一緒ね」「ん?」「昔々あるところに、佐藤とさという、夢見るアイドルがいました。彼女は、売れる分の魂を残らず売り払ってしまい、最後にはすっかり、空っぽのお人形になってしまいました」寂しげな笑顔のとき。

「.....とさ」「...秋元さん」「いや、名前じゃなくて」「え?」「いや、お人形になってしまいましたとき。の、とさ」「...なにそれ、おっかし」小さく笑う、二人の目線が切なく交差する。「...とさ」「それはなんの、とさ?」「いや、名前の」「え?」甘い沈黙の中、見つめ合う二人を引き裂く着信音。

「誰だ」「読者だよ。取り込み中失礼するが、私が今読んでる童話の話をしよう。真実を含んだ残酷な裏側と、書き換えられたお涙頂戴の表側。君ならどちら側を読みたい?」「何の話だ?」「さて、昔々あるところに、カメラを持った貧乏人とアイドルのように美しいお姫様がいました。二人は禁断の恋愛に堕ちたが故、人目を避けて逃走し、拳銃の果て無理心中に追い詰められました。...とさ」辺りを見回す秋元。「...監視してる、ってことか?」「いやなに、これが童話の書き換えられた表側だよ。ワイドショー好みのネタだろ?」「何が言いたい?」「童話の国を守る警護団には、闇接待で骨抜きにされた裏勢力と、それを潰したい表勢力の暗闘があるんだ」「警護団? ...警察か?」「さてね。それより君が知りたがっていた童話の残酷な裏側も聞かせてあげよう。もし、政略的な闇接待を断り続けた姫君と、カメラ一丁でスクープを狙う貧乏人が心中したらどうなるか。裏側を知る者は、見せしめの殺人だとすぐ気づくだろう。残された他の姫たちや貧乏人は、裏勢力の言いつけに逆らえば同様の死が待つことを自ずと悟る、ってオチだ」「...それが、俺たちを殺そうとする理由か?」「ただの童話だよ。だがこの童話には続きがある。ご存知のように我々読者は、登場人物である君たちを逐一見守ってきた。その素晴らしい活躍に免じて、新たな展開を書き加えよう。姫君はカボチャの馬車に乗って無事に保護されました。それと引き換えに、貧乏人は来週、姫たちが強制的に駆り出される秘密の船上舞踏会に忍び込み、怪しげな交際現場を撮影しました。...とさ、も付けようか?」「俺が断ったら?」「断らないよ、君は。これはクローズドな童話だ。登場人物は少ないほうがいい。ほら、名前がたくさん出てきたら、覚える読者も大変だろう? だから主人公の君が適役だ。それに君が断れば姫君はいずれ元の監獄に引き戻される。裏の勢力は強大で、君たちだけで逃れられる術はないからだ。それはいかにも悲劇的な結末だが、味わうのは我々読者ではない。君たち登場人物だ。つまり、待ち受ける悲劇から姫君を解き放つ魔法は、君の腕でもぎ撮るしかない。もちろん、君たちがバッド・エンディングを望むなら話は別だが」「...今まで俺ととさが近づくように、わざと泳がせてたってワケか」「確かに一度芽生えた情は、強い絆を発揮するものだ。しかしとにかく、君はよくやっている。ぜひこのまま、ハッピー・エンドを迎えてほしい。我々読者が筆を加えれば、更にゴールは近づくだろう」「ひとつ確認するが、ここにいる姫はちゃんと保護するんだな」「仰せのままに」

電話の主に案内され、警察の表勢力に保護される、とさ。「秋元さん、行っちゃダメ！」「なに、いつもの日常に戻るだけだ。……ちっ、悔しいが本当だな」「え？」「いや、なんでもない。それじゃ」

パーティ会場である豪華客船に忍び込み、プールや客室で行われる驚愕の接待現場を目撃する秋元。甲板に設置された大型ディスプレイを背に、全裸で踊るアイドルたち。決死の撮影に成功するも、厳重な警備に気づかれ一気に追い詰められる。万事休すと思われたそのとき。

上空からヘリコプターが現れ、とさが秋元の名前を呼ぶ。次の瞬間、ディスプレイ装置にはアイドルと権力者との閨接待を暴露した、とさの告発動画が映し出される。全世界へ配信され、船上でも映るように工作されたのだ。その際に秋元は危機一髪で船上から救い出される。

その後、数人のアイドルと権力者がスクープされ、そこで手打ちとなる。二人の活躍により、「多数の権力者の弱みを握ってコントロールする」という表勢力の目的は達成され、秋元は夢であった海外での報道カメラマンへの道を掴む。とさはその後もアイドルとして厳重に警護され、活動や言動を警察に管理される存在となる。

復帰後のライブ会場で、とさは大勢のファンに向かって挨拶する。

「私は、ファンの方一人ひとり、そう、あなたに、恋しています。あなたが、幾多の困難を乗り越え、今ここで、同じ時を過ごし、同じ空の下、同じ空気を吸っていること、生きていることを想うと、とてつもなく温かい、大きな喜びを感じます。だから、他の誰にも、浮気なんてしません。あなたに恋するアイドル、佐藤とさは、前からも、これからも、ずっと、ファンのあなたにだけ、想いを募らせ続けます」

鳴り止まぬ拍手と歓声を浴び、彼女はアイドルとして自然な笑顔を見せる。秋元は回想する。ヘリコプターの中で交わした、とさとの最後の会話を。

「あたし、もうイヤだ。秋元さんを巻き込んで、こんな苦しむならアイドルなんてやめたい」「泣くな。君はアイドルだ。アイドルが売る魂は、涙じゃない。アイドルなら、笑顔に魂を込めろ。ほら、昔のアイドルも言ってたろ。涙は飾りじゃないって」「あたし、アイドルやめたい。秋元さん、一緒に……」「悔しいが、君も俺も魔法にかかって、ヒロイックな童話の世界にちょっと迷い込んでただけだ。魔法が解けても君はアイドルだが、俺は王子じゃない。ただの貧乏なカメラマンだ。姫君の幸福を見届けたら、黙って荒野へ走り去る端役だ。ただ最後に、そうだな。じゃ姫君、私めにひとつ褒美の品を賜りくださらんか？」「なに？」「その笑い泣きの素顔を撮らせてくれ。アイドルじゃない、とさって女の子の笑顔を俺だけの家宝にするよ。だからこれからは、人前で涙を見せないと約束して」「…はい」

彼女の写真を懐にしのばせ、秋元はそっと会場を後にする。アイドルは涙を見せない。素顔は大事な人の心にだけ、届けばいいことを知っているのだから。

的な感じ。燃え尽きたよ。一本書き切った。この後「実はアイドルたちは全員、丸刈りのアンドロイドだった」ってSFオチで大どんでん返しっていうね。嘘だけど。

やっぱ今世紀は、あらずじ文学の世紀だと俺は勝手に思うね。言いたいとこだけきっちり書いたら、これ以上に手っ取り早い物語はないとひとりごちるね。もしちゃんとした小説版の方を読

みたかったら、Uが補完して書いて。後はまかしたから。

結論として。俺はこれ以上関わらない方がいいな。いろんな意味でアンタッチャブル。これ書き切ってそう思った。俺として丸刈りの元は取った。お釣りが来るかはお客さん次第だけど。

結局、体罰のこと書くスペースなかった。しかも書いたの消しちゃってたし。もう次は大マジで全く別の話題いきたいと思う。ひとつテーマがあって、俺より百倍達者な職業作家たちが書くのを真剣に待ってたんだけど、誰も書かないから俺が書こうと。

今回はこんな感じ。どうかな？



AKBという巨大装置のなかで

2012年AKB48の東京ドームコンサートのオープニング。「overture」が流れ、会場のファンたちがカラフルに光るサイリウムを振り「あ～よっしゃいくぞ！」

「AKB48!!!」とお約束でそろえた熱狂的な声を上げる。舞台中央の大きな幕が開くと、6段と36列に区切られた超巨大ショーケースが現れる。そこにずらりと収められたのは、統一された真っ赤な衣装を着たAKBグループの全員だ。無表情で気をつけの姿勢をとっている様子は、フィギュアのようなのだが、そこにいるのは生身の女の子たちである。

この舞台装置の一番上の高さは10m以上はある。ショーケース自体が動くこともあって、上段にいたメンバーはかなり怖かっただろう。しかし、ショーケースの狭いスペースに収められた女の子たちはただの商品なのだから、そんなことは言ってもらえないし、そんな声は聞こえてこない。あくまでもこれは、演出であるしエンターテイメントだ。可愛いアイドルたちを飾って眺めるといふ欲望を表現し、そして彼女らは収められた商品という役を演じた。AKB48という巨大装置のなかで。

フィギュアならともかく、生きた人間を物理的に閉じ込めるのは、実際には難しい。ヨーロッパでも日本でも、建造物として監獄が誕生したのは近代になってかららしい。それまでは危険な罪人は、ヨーロッパでは要塞や塔の限られたスペースに閉じ込められ、ロシアならシベリアという遙か彼方に放置され、日本ならば島流しという手段があった。ただ、これら中世の処罰はあまり経済的ではなかった。収めるスペースは建築的に難しいし、移送には危険と手間がかかり、食事の手配が必要な場合だってある。罪人を生かしたまま社会から殺すのは、よほどの理由がなければやらなかっただろう。主に罪人が有名人で人気者の場合、とりわけ王位継承のライバルや思想家などが対象になった。

ところで、指原莉乃が博多のHKT48に左遷となったのも、この論理に近い。秋元康の「神の一手」「奇跡の采配」と言われるが、指原はクビにするわけにいかないほど勢いと人気があった（総選挙4位）一方で、過去のこととはいえ、観に来たファンと連絡をとり、手を出して彼氏にしたという前代未聞のぶっ飛んだアイドルでもある。無罪のまま放置するとほかのメンバーへ危険な影響があっただろう。そして、遠方に左遷することで罪は流された。その後の復帰劇と活躍は知られたとおりである。ちなみにロシアではシベリアから生きて戻って来た罪人は一般人として扱われたらしい。

中世では危険な罪人は社会に影響がなければ殺してしまうのが手っ取り早かった。殺すまでもない場合は、たとえば鞭打ちなど身体を傷つける罰が一般的だった。きっと女に対しては髪を剃るという罰もあったかもしれない。

罰は罪に対して行う社会の自浄作用であり、予防処置でもある。罪人の命ひとつでは釣り合わ

ない場合は、残酷な刑罰が行われる。日本で言えば、ノコギリ引きや釜茹でなどがあった。

身体を傷つける罰が消えていたのは近代に入ってからだ。高度に発展した近代社会が、懲役による労働システムによって、罪人の利用価値を引き出せるようになったからということらしい。罪人を隔離するだけでは満足しない近代の合理主義は、罪人を労働力として利用していく。こうした社会の要請によって、近代のはじめに監獄が誕生した。

合理的であることが正義であり、さらには経済的であることが正義である。その論理の中では、経済的とは言えないような身体を傷つける罰は、野蛮の証であり、正義ではなくなってきた。

教育の手法はそう簡単には変えられないこともあり、一部、身体への罰は残っている。ただ、時代の流れは間違いなく、身体への罰は禁止する方向へ流れている。教育の場に残った体罰が今話題になるのは、こうした時代のうねりをよく表しているからだろう。

峯岸みなみが、丸刈りにして、自らの身体を傷つけた（まあ髪は皮膚とかと同じですすでに死んでいる細胞だが）ことがこれほどまで話題になったのも、時代のうねりを感じられたからではないだろうか。海外のメディアが多いに取り上げたのも「日本ではいまだにハラキリの精神が残っている」とまではいかないまでも、珍奇な文化として映ったからに違いない。

というわけで、ちょっと乱暴に体罰の問題と峯岸の問題について書いてみた。あまり大げさに書きすぎた。笑い飛ばしたかっただろう峯岸がかわいそうになってくるな。でも、大いに時代の流れを読み間違えるとこういうことになるってことなのかな。

あと今回は固く書きすぎたよ。もはや往復書簡でもないし（笑）。次からはもっと軽く書いていきたい。よろしく。(^o^) /



考えるウマシカ～第三回 『監獄の誕生』と丸刈りの消失～

<http://p.booklog.jp/book/66547>

著者：弦楽器イルカ+友人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/66547>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66547>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ